

# 放下としての有

ダミール・バルバリッチ

鷲原

知宏・井上 克人訳

## I

ハイデッガーは、彼の後年の講演「時と有」を自ら説明しつつ振り返りながら、「有の最も深遠な意味は放下（Lassen）である」という洞察が、自身の主導的な思索であることを明言している。有が有るものへと関わる関係が放下として規定されるとき、はじめて、この関係を因果関係と解してしまう一般的な誤解から、その拠りどころとなっている支柱が取り除かれるのである。なぜなら、放下は、「*„Machen“*（使役、作為）とは根本的に異なる」からである（1）。ハイデッガーは、それ以前にも、放下についての思索が彼の哲学全体にとつて中心的意味をもっていることを強調している。すでに一九三〇年には、自由の本質が「有るものを有らしめること

（*das Seinlassen von Seiendem*）として」規定されていたのだが、後に挿入された説明によれば、この有らしめることは、「有るものを有るがままに放っておくといった風に、それを度外視したり、それに対して無関心でいる、といった」「消極的な意味ではなく」、また（因果関係で理解されるような）「オンティッシュに方向づけられた作用（*Wirken*）としてではなく」、むしろ、「授けること（*gewähren*）」として、また「護ること（*Wahrnis*）」として理解されなければならないのである（2）。このような思索がハイデッガーにとってどれほど重要であったかは、次のことによっても確認できる。すなわち、放下の内にこそ有への唯一ふさわしい関わりがあるのだということ、改めてもう一度強調するために、ハイデッガーは五年後に上述の箇所をはっきりと引き合いに出してい

る。彼の主著「有と時」のなかで練り上げられた決意性 (Entschlossenheit)——本稿では後ほど意欲 (Wollen) の本質として明らかにするが——もまた、たとえどれだけ「悟性には奇異に思われる」としても、必然的に放下にその基礎を置いているのである<sup>(3)</sup>。

有るものを有らしめるとはどういうことなのか、その的確な理解は、同時に最も困難な課題であるとも言われている。この課題とは、次のようなものである。「有るものをただそれがそうであるところのものに有らしめることほど、容易に思えることがあるだろうか。いや、それとも、我々はこうした課題によって、最も困難なことに直面しているのではないのだろうか。というのも、とりわけそのような企て、つまり有るものをそれと有るとおりに有らしめるという、そういう企ては、なんら吟味されることのない有の概念に有利になるように有るものに背を向けてしまうといった無関心とはまるで正反対のことを表わしているからである。我々は、自らを有るものに向けなければならない、有るものそれ自身をその有に着目して思索しなければならない、しかしそうすることによって同時に、有るものをその本質に関してはそのままそつとしておかなければならないのである。」<sup>(4)</sup> この言葉に従えば、この奇妙な有らしめることがもつ困難さは、それが受動性ではなくて、むしろ「最高の行為」とでも言つてよいようなもの、いわば「作用」や「意欲」であつて、しかもそ

うであるにもかかわらず、他方では、それは断じて行為、つまり作用や意欲であつてはならない、という点にある<sup>(5)</sup>。

ここには、どのような謎めいた事態が現われているのだろうか。有の最も深遠な意味としての「放下」は、受動性を示すものではない。同様に能動性を示しているのでもない。さらに、少なくとも「放下」をなんらかの鈍くて怠惰な無関心と考へてはならない。そこでハイデッガーは、決定的な箇所から自らを解き放つこと、「地平を意欲するのを思いとどまることが」、そして、それと関連した「会域への依属のうちへと自らを放ち入れるようにさせること (Veranlassen zum Scheinlassen in die Zugehörigkeit zur Gegenei)」、これらはみな同じく依然として「意欲の痕跡を必要としてはいるが、けれどもそのような痕跡は自らを放ち入れることのみで姿を消し、最終的に本来的な放下 (Gelassenheit) のなかでは消えてなくなる」<sup>(6)</sup>。

## II

しかし、どのようにして意志は自らによつて、意志としての自己から離れ去るようにさせることができるのだろうか。もちろん、単純に自己を断念することを意志に強いることはできない。ここに伏在するアポリアをハイデッガーは意図的に強調し、そうすることによつて彼の課題を鋭く挑発的な仕

方で述べている。「思索へと向かう我々の省察において私が本来意図しているのは、意欲—しないこと (das Nicht-Wollen) である。」そして、それと同時に、ここに含まれているパラドクス、すなわち「意欲—しないことを意欲することによって、心ならずも意欲が自らのなかに巻き込まれてしまい、そしてまさしく意欲されていたこと、すなわち意欲しないことを見失なってしまう」(2)といったパラドクスの全体を究明することである。

ところがハイデッガーは、見たところ克服されていないこのアポリアにさほど強くは心を動揺させてはいない。彼の答は明確であり、しかも唯一可能な答であるかのように見える。彼の答とは、有の最も深遠な意味である「放下」について思索されることを通って、「能動性と受動性の区別の外」(3)にあるまったく新しい有の規定に向かう入り口にたどり着く、というものである。そこで思索されていることは、たしかに身近にあり、自明であるように思われ、容易に追体験できるものであると思われる。しかし、このことはそもそも何を意味しているのか。それは、これまで広く知れ渡り、そうこうしているうちに完全に地球的規模にまで広がってしまったヨーロッパの歴史全体から徹底的な仕方で訣別するという冒険以上に出るものではないし、またそれ以下でもない。というのは、受動性も能動性も本質的には、意志として規定された有の包括的な領域に属しており、ヨーロッパの歴史の

なかで意志は無制約で絶対的な優位の座を占めているからである。

ここでは次のことに注意を払わなければならない。ハイデッガーの言う「意志」をとりわけ人間の魂の能力と理解してはならない、ということ、そうではなく、それはきわめて一般的な「かのもの、つまり西洋の思索家たちの、皆こぞって一致してはいるものの、まだほとんど考え抜かれてはいない教説に従えば、魂や精神、理性、愛、生といった、そうしたものの本質がそこに根差しているところのかのもの」(4)と理解しなければならぬ、ということなのである。後者の理解では、むしろ「意志」は有それ自体の呼び名であると考えられている。しかも、このことは、「近代形而上学の完全なる始まり以来」にとどまらず、——近代形而上学において、この呼び名は、カントにあつては理性の意志として、ヘーゲルにあつては精神の意志として、シェリングの場合には愛の意志として、そして最後にニーチェにおいては力への意志として現われる(5)のだが——、そうした始まりを超えて、まさしく「すべての形而上学において」妥当するのである。なぜなら、形而上学においては、有るものの性 (Seiendheit) は、「ギリシア的そして近代の意味での」主体 (subiectum) 以外の何ものでもなく、そこでは主体は、意欲として、「しかも無制約な仕方で、自己自身を意欲すること (Sich-wollen) の意欲」として考えられている(6)。このことをハイデッガー

「は、次の二つの明白な文に要約している。『有るものの有は、意志である。意志は、個々の有ルモノ (ens) を、自己自身に向けてひとまとめにしつつ集摂する』」(Versammeln)である。』<sup>(12)</sup>

このような仕方では形而上学的に理解される意志は、計算的「表象」として、人間の思索の全体を占領してきた。さらにその同じ意志が、体験することおよび体験内容への無制約的な衝動として、人間の身体的・精神的組成態がもつ感情的なものをその支配下に置き、そして働かせてきた。世界は、それが有るものの有としての意志によって休みなく支配されている限り、もはや免れようもないほどに斯く決定づけられた現実性の地球的規模にまで及ぶ急き立て (Betrieb) だと、そう呼ぶことができよう。つまり急き立てとは、もっぱら活動と作業とその成果が有るものと無いものとを決定し、そして労働と業績のみが実際に価値をもつといった、そういうものである。『というのは、いかなる意志も活動 (wirken) を意志し、そしてその本領として実効性 (Wirksamkeit) を意志する。』<sup>(13)</sup> そのような世界に呪縛されたものとして、今日の人間性は、いわば「実効的なものとその成果に魅了されている」<sup>(14)</sup>。このことから次のことが明瞭になろう。すなわちそれは、有の本質を放下に見出そうとするハイデッガーの試みが、意志つまり活動と実効性によって規定された世界を根本から問い質すことへと向かうなかにあって、どの程度までその途上に

あるのか、ということである。『そして、労働と業績はそもそも人間の本質を測るのにふさわしいのかどうか。もし、ふさわしいものでないとしたら、いつの日か、すべての近代的人間性は、その絶賛される〈創造的な業績〉も含めて、それに対する反動としての自己忘却の空虚さのうちに崩壊してしまうに違いない。』<sup>(15)</sup>

### III

先に述べたことに従えば、哲学は今日いわばただ一つの課題に直面している。その課題とは、まったく新しい有の経験というものである。『我々が、自身の歴史的現有を歴史的なものとして作品のうちに置こうとするならば、有は根底からその可能的本質の広がり全体において新たに経験されねばならない。』<sup>(16)</sup> そのためのハイデッガーの哲学的寄与、すなわち有の本質たる放下についての思索がもっている根本的に新しいものは、さらになお普遍的で、なお一層深く把握された洞察、すなわち有の有限性についての彼の洞察を背景に、最も良く輝くのである。この洞察をより深く理解するためには、さしあたって次のことに注意しなければならない。すなわち、従来広く一般に行なわれているように、またハイデッガー自身も時折そうしたように、彼の哲学全体をもっぱら「有の問い」として規定してしまうことは、我々を迷わせるであろう、ということである。というのは、「有」といっ

た風に、有を名詞化した名称はすべて、その名称によって呼称されたものを恒常的な有るものにしてしまうという、おおよそ克服することのできない力をもっている。たとえば、ハイデッガーにとって中心的な問題である「有論的差異」を徹頭徹尾思索し尽くすという最大の困難さは、まさに次のような事態にその原因がある。つまり、「有」は、自らを個々のあらゆる有るものから区別しはするものの、「結局は」、その本来の意図に全く反して、許されないほど有るものと近くなってしまうのである。「真有 (Sein) と有るものとは、直接的には区別することはできない。なぜなら、そもそも真有と有るものとは、直接的な仕方では互いに何の関わりもないからである。有るものが有るものとしてもつばら性起のなかで揺れ動いているとしても、真有は、すべての有るものからは深淵を隔てて離れている。」<sup>17)</sup>「有」や「有そのもの」という表現は、そのように呼称されたものを「絶対的なものの個別化」へもたらす<sup>18)</sup>方向へ、いとも簡単に導いてしまうのだが、こうした洞察によって、ハイデッガーは後期の思索のなかでは、「個別化され切り離された〈有〉という語を放棄すること」、そして「断乎としてそうすること」を指示している<sup>19)</sup>。

以上のことをごく手短かに思い起こしておいたのは、これから述べる論述のなかで「有」を名詞として捉える理解を最初から締め出しておくためである。それゆえ、ここでハイデッ

ガーの或る一つの言説を出発点にするのが、最も良いであろう。その言説によれば、有は根本生起なのである<sup>20)</sup>。有が根本生起であるとは、何を意味しているのか。とりわけ、次のことである。有は有限であり、しかもそれは「真有の本質がそれ自身有限である」<sup>21)</sup>といったようなことではなく、むしろ有の本質がまさにこの有限性に存しているのである<sup>22)</sup>。人間のみならず有もまたその特性としてもつ背後に遡りえない有限性を、いやむしろ性起 (Ereignis) の有限性およびそれによって生起してきた世界—四方域 (Gewelt) の有限性を看取し、それを確認したことに、ハイデッガーは自らの最高の哲学的な功績を見ていた<sup>23)</sup>。有限性をただ単に人間のそれに局限せず、有そのものもつ有限性を唯一にして真なる偉大さ、尊さ、そして気高さとして示そうとする試みは、いわば導きの星として彼の哲学全体の頭上に浮かんでいる。「有限性の偉大さは、はるか以前に誤った偽りの無限性の光のなかで小さくなり、つまらないものになっている。その結果、もはや我々は有限性と偉大さを一つにして考えることができなくなっている。どうしようもない俗物として、人間が神の似姿なのではなく、むしろこの神こそが人間による見せかけのこしらえものなのである。」<sup>24)</sup>

#### IV

有に本質的な有限性は、とりわけ、有がそれ自身のうちに

徹底的に無を潜ませている (nichthafte) ということに現われている。「どこまでも無によって限なく照射されてこそ真有は現成する。」<sup>(25)</sup>

有と有るものとの間にある區別は、現に眼の前にある單純な分割ではなく、有るものを「無にする (Nichten)」という、恒常的で、不斷の生起なのである。決定的に重要なことは、ハイデッガーが意外にも十分すぎる位に「無にする」とか「無化 (Nichtung)」と呼んでいるものを、有るものを根絶するとか、あるいは有るものを否定するという意味だけで理解してはならないことである。事情はまったく逆であつて、この無化はどのように有るものの拒否として生起するのだが、同時にそれはまた、「沈みゆく全体としての有るものへと滑り落ちさせつつ「有るものの有へと」指示すること」<sup>(26)</sup>でもあるのだ。全体としての有るものの拒否というこうした無化する根本生起と、このような「無化によって拒否された」有るものへの同時的指示のうちには、「我々が途方に暮れてしまつて無規定なままに『有』と呼んでいる」<sup>(27)</sup>まさにこのもの「すなわちもはや有るものならぬ有、そのもの」が隠されている。それゆえにハイデッガーは、有るものの有のなかで「無 (Nichts) の無化」が生起する、と言うことができたのである<sup>(28)</sup>。別の言い方では、「有は無にする——有として……(中略)……有のなかの無にするものは、私が無と呼ぶものの本質現成 (Wesen) である。」<sup>(29)</sup>

すべては次のことに懸かつている。無、および有に伏在する無化と無を潜めているもの (Nichtaufe) を、何か不十分なもの、その意味で單なる否定的なものとみなしてはならない。無は何か取るに足らないものではなく、「真有の本質のなかのとてもなく底知れぬもの、際立って測り知れぬもの」である、ということハイデッガーは強く主張している<sup>(30)</sup>。有と無の隠れた同一性を語ってもほとんど惑わされることはないであろうし<sup>(31)</sup>、また無を「有のベール (Schleier)」<sup>(32)</sup>として見抜かなければならないとする有名な比喩もほとんど事情は同じであろう。これほどまでに有と無は、親密に繋がっている。

「無を潜めているものが本質現成する力」<sup>(33)</sup>という観点に立つてみれば、人間の臆病でしかも思いあがつた盲目性は、これまでのヨーロッパの形而上学の全体が拠つて立っていた根拠であると思われる。「我々は否定的なものを——以前からずっと——あまりにも否定的に考えすぎている、そう言つてよいだろう。」<sup>(34)</sup>別な言い方をすれば、「我々は、今もなお相変わらず、《無い》と《無》に伏在する秘密の傍らを急ぎ足で通り過ぎて思索している。」<sup>(35)</sup>有の本質の内にある無を潜めているものと我々の関係はずっと以前から、——ハイデッガーの確信するところによれば、それは最も遅くてもプラトン以来——、無条件にそれを拒絶するという関係であり続けている。さしあたり人は、無を潜めているものを有つて

はならないもの、したがって、まったく好ましくないもの、否定されるべきものとして解釈している。こうした傾向は、無を潜めているものを「悪」として道徳的に解釈しなおすことによつて、より一層強まり、したがってそれを無条件に遠ざけ、できる限りそれを拒絶することは、しごく当然のことのようにみなされてしまうのである。無を潜めているものに特有な反発的抵触性のうちには或る危険が隠れているのだが、それは、目が眩んでそれを見逃してしまう矮小化によつて、なおさら一層増大していくのであつて、そのことに人は、まったく気づいていない<sup>36)</sup>。無と直面するも、なんらたじろぐことなく、逃げも隠れもせずに敢然と立ち向かう冒険を犯す代わりに、人間はただただ有るものの内部にとどまり、実にさまざまな仕方でこれらの有るものを操作している。多種多様な作業と製造によつて、つまり有るものの圏内でつねにがむしゃらに労働することによつて、危険に曝された無から永遠に逃れられているのだという、誤った考えが、そこに含まれている。「そして、有るものにとどこで何らかの仕方であつて、それを保持している限りは、無に対してずつと安心していられると考えるのは、人間が犯す最大の思い違いのひとつに含めることができる。この思い違いの優勢は、おそらく、有るものに一切危害を加えないでおくことのできる無、とりわけ有るものがいっそう（有る）ようになる場合には最もそうであるような無、そのような無に対して眼

を眩ませる主要な要因であるかもしれない。」<sup>37)</sup> 無に対して眼を眩ませるのは、有限性を有の真性として認めることができないからである。まったく反対に人は、無限性を絶え間ない持続の意味で、最高の価値と思ひ込んでいる。これとまったく同じ調子で、いかなる有るものも、出来る限り長く、もし可能であるならいつまでも長く持続していることだけが重要なこととされる。個々の有るものに生起しているすべて、そして有るものが行為したりしなかつたりすることのすべてにわたつて、それらを統べているのは、たった一つの絶え間ない衝動、すなわち、恒常的に自らのもとに留まろうとし、繰り返して自己自身へ向けて収束し、そしてこうした二重の仕方であつて自己自身の妨げられることのない持続を確実なものにしようとする、そういう衝動なのである。まさにこうした恒常的同一性への無制限的衝動こそが、形而上学的な意味における意志として規定されるべきものである。「有るものの有は意志である。意志は、個々の有ルモノ（ens）を、自己自身へとひとまとめにしつつ集摂することである。」<sup>38)</sup> とはいへ、それにもかかわらず、その意志そのものを一貫して規定しているもの、そして、ますます増長してゆく行動へと誘導するなんとも抗しがたい窮迫をその意志に引き起こすもの、これらのものはまったく隠されたままなのである。こうした意志それ自身がもつ、つねに隠された無底の根拠を、ハイデッガーは「冒険からの回避」<sup>39)</sup>のうちに見て取つて

いる。

## V

有の有限性を経験し、その価値を認め、それに敬意を払うと同時に、従来の有の歴史 (Seinsgeschichte) のなかの意志に根拠を置いているエポックを乗り越えていく決定的な歩みを準備するという、最高に哲学的な課題に取り組むなかで、ハイデッガーは「真有そのものに伏在する無化するものを…… (中略) ……最も隠された贈与として経験する」<sup>(40)</sup> という冒険に乗り出す。およそ考えられうるあらゆる仕方でも無を捉えなおし、同時に無を矮小化したり排除したりすることはせずに、反対にハイデッガーは、「それぞれの有るものに有を保証しているものの広大さを…… (中略) ……経験すること」<sup>(41)</sup> を試みる。こうした大いなる冒険は、つねにすべての根拠から突如として離脱すること (Ab-Sprung) としてのみ生起し、その離脱もその都度深淵 (Ab-grund) へと跳び込むこと (Zu-Sprung) として示されるのだが、このような大いなる冒険においては、今ではもはや盲目的に恐ろしいものではなくなった無が、有それ自身の本質に潜む非日常的で秘密に満ち、まったく不可思議としか言いようのない拒否と躊躇という姿を取って現われるのである。このためらいつつ拒むことこそが、実際には究極の根源であって、それは、そのつど有るものとみなされるものを、自由なるが故に根拠無しに与え

(Geben) 、送り届け (Reichen) 、そして贈る (Schenken) 働きのなのである。そして将来の哲学の真性は、ひとえに次の点に懸かっている。すなわちそれは、「我々をはじめて本来的に有とその真性の内へと移し、置く (ent-sehen) 真有自身の無化作用を、最も隠された贈与として経験」<sup>(42)</sup> できるほど我々は「十分強く」なるのかどうか、ということであり、ここにハイデッガーの最も深い洞察、彼の哲学の最高の思索があるのである。「しかし、無を潜ませているものや否認、たとえば拒絶や遅延や拒否といったようなものについて我々が知っているのは、どれほど僅かなことか。それらはいずれも決して空虚なものではなく、せいぜいのところ——より高いものではないとしても——それとは正反対のものである。否定 (Nicht) や否認 (Nein) は、豊饒なるものの過剰にその発生原因をもっており、最高の贈与でもありうるのだ。そしてこのような意味を含んだ否定や否認として、よく馴染んだいずれの然り (Ja) をも無限に、すなわち本質的に凌駕している。こうしたことは、我々の計算的な悟性の視界には決して入っては来ないのである。」<sup>(43)</sup>

「放下」ということで本来何が思索されるべきなのかが、今やより明瞭になるであろう。放下のなかに、そして放下として生起するのは、有のなかの無化作用 (das Nichten) 、もっと正確に言うならば、有がためらいつつ拒むこと、つまり有の脱け去り (Entzug) である。この有の脱け去りは、見た



ところ単純に否定的なイメージがこの語にまわりついてい  
るにもかかわらず、実際のところは、それが有るものを有と  
はまったく異他なるものとして与え、手渡し、贈る、つまり  
一言で言えば、有るものをそう有らしめているのであり、そ  
の限りでは、根源の性格をもっている。

誤って理解されがちな否定的なものの根源性格、つまりた  
めらいつつ拒むという有の根源性格を、そして「拒むことが  
もつ測り知れない贈与」(44)を、ハイデッガーは後期の思索  
のさまざまな道の途上でいつも新たに証し示すことを試みて  
いる。まさにこのことに、ハイデッガーの哲学的著作の全体  
とは言えないまでも、後期の著作のすべてを集約している中  
心が置かれている、そのように言っても過言ではあるまい。

## VI

有るものを有らしめる有の脱け去り (Seinsentzug) は、  
「近づける近さ」として、時の四番目の次元、正確には時の  
一番目の、したがって最も根源的な次元を形成している。こ  
の次元は、それに固有な「拒絶しつつ留保する」という性格<sup>(45)</sup>  
でもって、他の三つの時の次元のそれぞれを、それぞれの次  
元のために統一的な仕方で手渡すこと、すなわち「時の固有  
性のうちに戯れつつ送り届けること」<sup>(46)</sup>をさせる。<sup>[訳注参  
照]</sup>

有の脱け去りはいわば「虚空」なのだが、いわゆる欠如や

不足とは遠くかけ離れており、まさに場所 (Ort) と在所  
(Ortschaft) を許容し、それと同時に空間そのものを空け渡  
すところのものである。とりわけ「彫刻的形体化」の芸  
術においては、「探し求め、企投しながら場所を打ち建てる  
という仕方、虚空が役割を演じている」<sup>(47)</sup>。

有のためらいつつ拒む性格が、「静寂」として、はじめて  
語と言葉を生じさせる。静寂の例で最も適切なものとして即  
座に思いつくのは、「無を潜ませているものや否認、たとえ  
ば拒絶や遅延や拒否といったようなものについて我々が知っ  
ているのは、どれほど僅かなことか」<sup>(48)</sup>という文言である。  
「静寂を……(中略)……我々は、騒音や妨害が不在であるこ  
と、遠くに去っていること、無いことと考えている。しかし  
そのようにして我々は「静寂がもつ」根源的なものを、何か  
否定的なもの、つまり騒音とか妨害とかをひとまず念頭に置  
いた上で、それを打ち消すものといった具合に理解している  
が、その際、否定と否認の本質を熟慮することはない」<sup>(49)</sup>。静  
まりかえった「静寂の響き (Geläut der Stille)」、言うなれば  
太古の沈黙の内に潜む元初の響振が、詩作の穏やかな衝動に  
よってはじめ、打ち破られなければならない。そうするこ  
とで、我々が普通はほとんど何も感づいてはいない真正で根  
源的な語を成立させるのである<sup>(50)</sup>。

こうした有の脱け去りは、「会域 (Gegnet)」の「自由な広  
闊たる開け (freie Weite)」として、世界の諸事物を相互に関

係づける、すなわち、或るものを他のもののために開き、或るものを他のものに向け、そしてそのような仕方で、「あたかも、そこには何も性起していないかのごとく、それぞれのものをそれぞれのものに、そしてすべてのものを相互に関わらせつつ、個々のものがそれ自身のうちに安らいつつ滞留することへと集摂するのである」(51)。

普通誤解されている何かしら否定的なもの、実はその背後には、有そのものの「無化作用」およびそのためらいつつ拒むことが隠れ潜んでいるのだが、そうした否定的なものがある、ものを有らしめ、言い換えれば、与え、手渡し、贈るという本性のここに挙げた例証とそれ以外の多くの例証のすべては、とりわけ次のことへの指示として理解されるべきである。つまり、我々人間と全体としての有るものへ届けられた有の最高の贈与を、有の脱け去りの内に看取することが肝要だということである。この看取によって、人間と有の本質の深部に及ぶ転換が、準備と積み重ねていく経験の長い道のりの途上で、靜かに目立たない仕方で性起することができるのであり、ハイデッガーはそこへと向かう途上にあった。この転換は、さしあたりは思索のなかで生起するのであって、それ以外のどこにも生起することはない。秘密に満ちた内容を意図的にもたせた放下の所在究明の内に——この表現はおそらく他のハイデッガーの著作のどれよりもこう言うにぴつたりとふさわしいと思うのだが——日本的知性の伝統へ架橋す

ることをハイデッガーは慎重にほめかしていた。純粹に自らの内に安らうことへと放下する意欲、そして「意欲することとを拒否しつつ、自らを意志ならざるものへと放下せしめる」ような意欲、そのような意欲は「耐えて待つ、気高い心 (die langmütige Edelmüt)」への途上で翻転する。このような気高い心に思索の新しい本質を思い描くことができよう。しかし、この思索の新しい本質とは、とりわけそれ自身において、そしてより一層根源的には、感謝であるような本質であり、その感謝とは、「何かのために感謝するのではなく、感謝することが許されていることに、ただ感謝するだけの」(52)、そのような感謝なのである。

★本文中の亀甲括弧内は、訳者による補足である。

### 訳注

この部分の本文だけでは理解が困難なので、多少補足説明しておきたい。人間は必ずしも現前しているものにばかり関わり合っているわけではなく、現前していないものを、「不現前 (Abwesen)」にも関与しているのが実状である。例えば我々の過去と未来がそうであろう。ともに現在ではないとはいえ、両者は絶えず何等かのかたちで現在にまで浸透してきており、現在の我々の有り方を決定づけていると言つてよい。すなわち、過去は「もはやーない」「既在 (das Gewesen)」としていつも我々に「現前して」きており、未来も「未だーない」という仕方では我々に到来して「auf-juns-zukommen」おり、つまり「将来 (die Zukunft)」というかたちで「現前して」きてくる。このように見えてくると、「既在」も「将来」も共に「現前」してきており、我々に届けられているということが明らかになる。つまり

「不現前 (Abwesen)」も「現前 (Anwesen)」の一つの様態であるということである。だとすれば、「現前」はいわゆる「現在 (die Gegenwart)」という語と必ずしも符合するとは言えず、「現在」も「現前」の一つの様態に過ぎないということになる。こうした「不現前」をも自らのうちに含んだ広い意味での「現前」にハイデッガーは「送遣 (das Schicken)」(ZS.8) という名称を与えている。要するに、現在、既在、将来のいずれのうちに「現前」という「送遣」があるということである。ところが彼はこの「送遣」という働きを人間に送り届けられるということに関わりなく、現前それ自体に於ける働きと見なすことによって、ほぼ次のようなことを述べている。すなわち、将来は既在へと自らを送り届けると同時に既在を既在として引き出し、既在はそのように将来から呼び起こされることによつて将来へと自らを空け渡すのである、そして将来と既在とのこうした相互連関作用が現在へと送り届けられると同時に現在を現在として出現させるのである (ZS.14)。と。つまり、将来、既在、現在の三時相はそれぞれ別個に独立して並列的に連続しているのではなく、同時的な脱自的統一というかたちをとって、相互に自らを届け合いながら呼応し、互いに誘引し合つて、三時相それぞれ固有性を発動させ合っている、とも言えるであろう。このような三時相の相互の「手渡し合い (Zuspiel)」こそが本来的な「時」のその自体相に於いて目撃された根源的な働きなのであつて、そう見てれば、「本来的な時」は四次元的である (ZS.16) ということになる。とは言つても届け合い、手渡し合うという働きは、三つの時間的位相に後から追加された第四番目の位相ということではなへ、むしろ将来、既在、現在をそれぞれ「間近に」つなぎ留める (an-fangend) 元初の、第一の働きである。それは三時相をそれぞれ相隔つながら同時にそれらを近づける「近さ (die Nähe)」である。すなわちこの「近さ」の近づける働きは、既在を、もはや現在にはなり得ない次元としてその到来を「拒絶する (verweigen)」とつう仕方でも、いまでも「既在」として開け放つておき、同様にして将来をも、それが現在に

なつてしまふことを「留保する (vorenthalten)」という仕方でも、いまでも「将来」として開け放つておくのである。こうして、近づける「近さ」は「拒絶 (Verweigerung)」と「留保 (Vorenthalten)」という性格を内蔵しているのである (ibid.)。そして三時相をこのように相互に隔て保ちつつ近づけるという「時」の元初的次元の働きから「時一空 (Zeit-Raum)」とつう「開け (das Offene)」が開かれてくる。それはいわゆる「空間」を初め、「空間」として空け開くところの空間以前 (vor-räumlich) の領域である。したがつて「近さ」は、こうした時空の開けを授け与えることにも、既在と将来をそれぞれ拒絶し留保しつつあることから「露開」ついで「覆蔽する送り届け (das lichter-verbergende Reichen)」(ibid.) とつう称されつつある (Zur Sache des Denkens, 1969, Max Niemeyer Verlag, Tübingen) (井上)

## 略号一覧表

- VS : M. Heidegger: Vier Seminare. Übersetzung der französischen Seminarprotokolle von Curt Ohwadt, Frankfurt am Main 1977.  
(Auch in: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 15: Seminare. Durchgesehener Text der Einzelausgabe. Herausgegeben von Curt Ohwadt, Frankfurt am Main, 271-400.)
- VWW : M. Heidegger: Vom Wesen der Wahrheit (1930). In: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 9: Wegmarken. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Herrmann, Frankfurt am Main 1976.
- EM : M. Heidegger: Einführung in die Metaphysik, Tübingen 1953.
- UK : M. Heidegger: Der Ursprung des Kunstwerks (1935/36). In: M. Heidegger: Holzwege, 6. durchgesehene Auflage, Frankfurt am Main 1980. (Auch in: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 5: Holzwege. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Herrmann, Frankfurt am Main 1977, 1-74.)
- GA 77: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 77: Feldweg-Gespräche

- (1944/45). Herausgegeben von Ingrid Schüller, Frankfurt am Main 1995.
- N II : M. Heidegger: Nietzsche II, Pfullingen 1961.
- GA 49 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 49: Die Metaphysik des deutschen Idealismus. Zur erneuten Auslegung von Schelling: Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände (1809). Herausgegeben von Günter Seubold, Frankfurt am Main 1991.
- WD : Wozu Dichter? (1946). In: M. Heidegger: Holzwege, 6. durchgesehene Auflage, Frankfurt am Main 1980. (Auch in: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 5: Holzwege. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1977, 269–320.)
- GA 65 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 65 : Beiträge zur Philosophie. Vom Ereignis (1936–1938). Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1988.
- Wm : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 9: Wegmarken. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1976.
- ZSf : M. Heidegger: Zur Seinsfrage (1955). In: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 9: Wegmarken. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1976.
- SchA : Schellings Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit (1809). Herausgegeben von Hildegard Feick, Tübingen 1971.
- ZS : M. Heidegger: Zeit und Sein. In: M. Heidegger: Zur Sache des Denkens, Tübingen 1976.
- ZS Protokoll : [M. Heidegger]: Protokoll zu einem Seminar über den Vortrag „Zeit und Sein“. In: M. Heidegger: Zur Sache des Denkens, Tübingen 1976.
- GA 31 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 31: Vom Wesen der menschlichen Freiheit. Einleitung in die Philosophie. Herausgegeben von Hartmut Tietjen, Frankfurt am Main 1982.
- WIM : M. Heidegger: Was ist Metaphysik? (1929). In: M. Heidegger:

Gesamtausgabe, Bd. 9: Wegmarken. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1976.

BH : M. Heidegger: Brief über den Humanismus (1946). In: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 9: Wegmarken. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1976.

GA 51 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 51: Grundbegriffe. Herausgegeben von Petra Jaeger, Frankfurt am Main 1981.

WIM Nachwort : M. Heidegger: Nachwort zu „Was ist Metaphysik?“ (1943). In: M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 9: Wegmarken. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1976.

GA 13 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 13: Aus der Erfahrung des Denkens (1910–1976). Herausgegeben von Hermann Heidegger, Frankfurt am Main 1983.

GA 45 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 45: Grundfragen der Philosophie. Ausgewählte „Probleme“ der „Logik“. Herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt am Main 1984.

GA 39 : M. Heidegger: Gesamtausgabe, Bd. 39: Hölderlins Hymnen „Germanien“ und „Der Rhein“. Herausgegeben von Susanne Ziegler, Frankfurt am Main 1980.

## 附

- (一) VS 101. (二) VW/V 188. (三) EM 16. (四) UK 16.  
 (五) UK 69. (六) GA 77,142f. (七) GA 77,51. (八) GA 77,108f. (九) GA 77,78 W. (十) NII 452. (十一) GA 49,90.  
 (十二) WD Hw 274. (十三) GA 77,143. (十四) GA 77,129.  
 (十五) GA 77,71. (十六) EM 155. (十七) GA 65,477. (十八) Wm 321a1. Auflage 1949. Hervorh. von Heidegger. (十九) ZSf 408.  
 (二十) EM 153. (二十一) SchA 99. (二十二) SchA 195. (二十三) ZS

- Protokoll 53. (24) GA 31.136. (25) GA 65.483. (26) WiM 114. (27) Zsf 407. (28) WiM 114. (29) BH 360. Vgl. VS 99:「無の本質は、有るものからの離反と隔たりに存する。この隔たりのなかでのみ、有るものは有るものとして顕わとなる。無は有るものの単なる否定ではない。反対に無は、その無化するはたなきによって、我々を有るものの開示性へと指し向ける。無の無化作用は有るのである。」
- (30) Scha 122. (31) GA 51.54. (32) WiM Nachwort 312.  
 (33) GA 65.84. (34) GA 51.108. (35) GA 13.220. (36) GA 65.117. (37) GA 51.53. (38) WD Hw 274. (39) GA 65.481.  
 (40) GA 65.267. (41) WiM Nachwort 306. (42) GA 65.267.  
 (43) GA 45.151f. (44) GA 65.23. (45) ZS 16. (46) ZS 15f.  
 (47) GA 13.209. (48) GA 45.151f. (49) GA 45.151. (50) GA 39.218. Vgl. GA 51.64. (51) GA 77.114f. (52) GA 77.148.

# 【筆者紹介】

一九五二年ユーゴスラヴィア（現クロアチア）生まれ。ザグレブ大学にて哲学・社会学・政治学・古典学を学ぶ。同大学博士号取得。現在ザグレブ大学教授。著書に『世界を自己のものとする』ことハイデッガーとガダマー、編著に『プラトン 善と正義』、『後期ハイデッガーの作品 性起・言い示し』等がある。

この翻訳は、鷲原知宏が一旦作成した訳稿を、井上克人がドイツ語原文と再度照合し、二人で検討して成ったものだが、翻訳の最終的な責任は井上にある。

（ダミール・バルバリッチ サグレブ大学）

（わしはら ともひろ・関西大学）

（いのうえ かつひと・関西大学）

本稿は、二〇〇八年三月三日（日）、石川県西田幾多郎記念哲学館の哲学ホールで催された「第二回日独哲学交流シンポジウム」での発表（独文）を原版とし、同・哲学館で発行の『点から線へ』第53号に掲載されたものの転載である。このシンポジウムは、ハイデッガーの故郷・メスキルヒ市と、西田幾多郎の故郷・宇ノ気町（現在はかほく市）との姉妹提携事業として、それぞれの市で二年おきに交互に行われている。当日の通訳と司会は、大橋良介・名誉館長によってなされた。